

直言

この三月上旬にカナダを訪れた。カナダの首都オタワにあるカールトン大学での国際セミナー「東アジアの政治改革」で初日の基調講演を依頼され、翌日は終日討議に加わったと言う短時日の滞在であったが、中国の「改革」、ソ連のペレストロイカ、韓国や台湾の民主化、それに折しもリクルート疑惑に揺れる日本の現状など、論議は多岐にわたった。

そのなかで、日本は経済は美に見事なのに、政治は貧困だし、外交となると「日本外交」と銘打てるものは皆無ではないか、との厳しい意見が出されて、私は甚だ肩身の狭い思いをしたのである。

いまや世界のGNPの一五%前後を占める経済大国・日本であるだけに、このような質問にたいして、「日本外交」など無い方がいい、「経済外交」「商人外交」だけの方が良いのだ、と言って済まされる時代ではなくなりつつある。

つある。

アメリカはレーガン政権が、とくにその末期にいたって、米ソ関係の打開のために歴史的な軍縮外交を展開し、ブッシュ新政権もじわじわと新しい「アメリカ外交」を展開しつつある。

ソ連のゴルバチョフ「新思考」外交についてはいまさら言うまでもない。経済的混乱に揺れる中国も、中ソ関係改善を軸とする意欲的な「多面外交」を展開しており、サッチャー首相のイギリス、コール政権下の西ドイツ、ミッテラン大統領のフランスも、国際情勢の緊張から緩和への動きに先んじて、それぞれに個性的な外交を展開している。韓国の「北



東京外国語大学教授
中嶋嶺雄
なかじま かねお

方外交」や台湾の「弾性外交」も着々と成果をあげつつある。

こうして見ると、「日本外交」がその理念においても外交戦略においても、いかに貧弱であるかが歴然とするのである。

ひるがえって見てみると、わが国は七〇年代初頭の米中接近以来、ごく最近の米ソ接近そしてこの五月中旬の世紀の中ソ首脳会談を迎えてさらに進展するであろう中ソ接近にいたるまで、同盟国や友好国にさえつねに頭を越されており、外交的には完全に置いてけぼりになってしまっている。

米中接近はあり得ない、米ソ関係が緩和するはずはない、中ソは和解するはずはない、とつねに大局を見誤ってきた外交当局の硬直した姿勢と分析力の弱さにも問題はあろうが、より根本的には「日本外交」を真に担い得るステイスマンが不在だという深刻な状況に帰せられるのではないか。

日本に外交はあるのか